

一般演題(口演)17

患者支援

座長：井原
丸岡

O17-099

思春期にある神経性やせ症と強迫性障害の児への経口摂取につながる看護

秋山 若菜

自治医科大学とちぎ子ども医療センター

目的：神経性やせ症と強迫性障害は併存率が高く神経性やせ症を難治化する一因であると言われている。今回神経性やせ症と強迫性障害が併存し強固な症状や治療へ強い抵抗を示し、経口摂取移行に難渋した患者が経口摂取へ移行できた看護の関わりを明らかにすることを目的とした。方法：10代半ばの神経性やせ症と強迫性障害で入院し経口摂取に移行できた患者1例の入院中の診療記録と看護記録を病状経過に沿って、実践した看護と患者・家族の反応を抽出した。質的分析の手法を用い、入院中の過程を3つの時期に分け看護実践の大項目と小項目を抽出した。分析は小児看護専門看護師にスーパーバイズを受け、繰り返し検討し信憑性を高めた。研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。開示すべきCOIはない。結果：看護実践は3つの時期で10の大項目が抽出された。時期を「大項目を【】とする。「全体像を探り病気や治療と向き合う土台作りをした時期」は治療方針の意思決定支援や疾患教育を通じ【疾患・治療の理解に繋がるよう働きかける】、強固な強迫行動に根気強く対応し【やりとりの中で身体と心の状態を探る】ことをしながら、医師と連携し【病態の理解と安全な治療方法を模索する】【日常生活の破綻を最小限にし身体回復を目指す】関わりを行った。「信頼関係を築きながら治療を続けた時期」は身体拘束による児と家族の治療への葛藤を【倫理的な視点で捉え安全に治療を継続できるよう支える】、治療経過で表出された児の思いや行動を否定せず症状と付き合いながら【児に対する理解を深め信頼関係を構築する】、児に関わるうえで役割分担し【他職種でフォーメーションを組み児を支える】を実践し、経口摂取に移行できた。その後「経口摂取を見守りながら退院に向けて準備した時期」は残存する確認行動を否定せず受け止め【動向を見守りながら退院後の治療や生活を見据えて関わる】ことで経口摂取を継続することができた。考察：強迫症状が先行する中、根気強く症状に付き合い児の病態や心の状態の本質を探りながら関わることで、アタッチメントが形成され治療的な信頼関係構築ができたと考える。他職種で環境調整し児や家族を支えアタッチメント対象を拡大することで、児が疾患や治療に向き合うことができ経口摂取に繋がったと考える。形成されたアタッチメントを多職種で育みながら関わっていくことが、児の治療を支えるうえで重要であると考える。

患者支援

座長：井原
丸岡

健二 (大分大学医学部 小児科学講座)

達也 (まるおかクリニック)

O17-100

LGBTQの子どもを支えるための一考察

佐野 葉子

東京福祉大学 保育児童学部 保育児童学科

【緒言】 LGBTQとは、性的マイノリティのLesbian（レズビアン、女性同性愛者）、Gay（ゲイ、男性同性愛者）、Bisexual（バイセクシュアル、両性愛者）、Transgender（トランスジェンダー、性的マイノリティ）を意味する言葉である。LGBTQの人は様々な報告があるが、5～10%いると報告されている。LGBTQの人は自分のことを人に知られたくないという思いや葛藤を抱え生活している人も少なくない。特にトランスジェンダーの人は、幼児期より自分の性別の違和感抱えていることが多いと言われている。またLGBTQには鬱状態に陥りやすいとの報告もある。今回LGNTQについて前向きにとらえている当事者にインタビューを行い、なぜ前向きにとらえられたのかについて分析を行うため質的に調査を行った。【研究方法】 対象者2名に対し、研究の目的、方法、研究を説明し、研究参加は自由意志であること、研究に参加しなくても不利益は生じないこと等を説明し、研究に参加してもらった。対象は、LGBTQの当事者2名である。対象者にLGBTQの思いに関する内容の半構造化面接を行い逐語録を作成し質的に分析を行った。【結果】 対象者は2名とも20歳代である。対象者2名とも幼児期から性的違和感があった。対象者Aは、自分の性認識について最初はよくわからなかった。生まれたときから男として育てられたが、幼児期から自分の性は男でないように感じていた。その後洋服をかわいいものを着てみたりしたが、自分の気持ちと違っていた。対象者Bは幼少期から体の性と性認識が異なっていたが、自分の思うままに過ごしていた。周りのLGBTQに人がなぜ自分の性について隠しているのか不思議に思うと語っていた。【考察】 LGBTQと言われる性的マイノリティの人は、他の人と違うという思いを抱え生活している人が多い中で、今回は自分のありのままの状況で生活している人を対象に研究を行った。2人とも幼児期から性的違和感を抱えていたが、自分を隠すことなく生活できている要因は、隠すことは面倒である、自分に嘘をつきたくない、という思いからであった。社会の中でLGBTQに関する理解は深まったとはいえ、全ての人が自分の思うとおりに生活できていない現況がある中で今後さらに研究を進める必要性があると考える。